

## はじめの一步 ～震災と向き合っただけに見えたもの～

「このフィールドスタディに参加して良かった」と私は自信を持って言える。なぜなら、このフィールドスタディは私に大きく分けて三つの「キッカケ」を与えてくれたからだ。

まず、私がこのフィールドスタディに応募した一番の理由は、日本で起こった東日本大震災という事実と、現地に行くことで向き合いたかったからだ。東京で暮らしてきた私は、どこかでその事実と真正面から向き合うのを避けてきた。しかし、その事実から避けている自分に、日本国民として恥ずかしさや被災した方々に対して後ろめたさをずっと感じていた。そうした点でこのフィールドスタディは、私に東日本大震災と向き合う「キッカケ」を与えてくれた。次に、このフィールドスタディは「東北」というフィールドで起きた東日本大震災について今一度考える「キッカケ」を与えてくれた。私がこのフィールドスタディで一番考えたのは、東北というフィールドに住む人々の性格についてである。私が短いフィールドスタディの期間で感じた東北の方々の人柄は「働き者で面倒見がよくて我慢強く、ポジティブでたくましい」だ。なぜかという、今回フィールドスタディで訪れた北上町の人々はよく笑う。大声で笑う。なぜそんなに明るいのか尋ねたら「いつまでも落ち込んでいてもしょうがないから」と言っていた。また、「東日本大震災は悪いことばかりじゃない」と北上の人々は言うのだ。私はこれが被災地に訪れて一番驚いた事である。私はそういった東北の方々の人柄に惹かれた。もし自分だったら絶対にそんな考えはできない。また個人主義者が多く、近隣の人とのコミュニティのない東京でもし大震災が起きたら、大変なことになるだろうと思った。震災を悪いことばかりじゃないと考える理由は「東日本大震災がなかったら絶対に出会えない人に出会えたから」だと言う。今回のフィールドスタディでは二つの立場の人々と関わった。一つは被災した人々。もう一つは復興を支援する人々だ。その復興を支援する人々は、外部にいて他に仕事を持っていたが、震災が起きてから被災地に住み着いて活動をしている。そういった人々がいることもこのフィールドスタディに行き初めて知った。またそういう人々の存在を知って「本当のボランティアとは何か」ということを考えた。私はボランティアとは歓迎されるものだと思っていた。しかし、復興支援している方の話にもあったが、外部の人がその街に住み着いても全員が全員、そのボランティア活動を受け入れ、人物を受け入れてくれるわけではないと聞いて驚いた。また、私は被災した二人の方に、ボランティアについて聞いてみた。まず、主婦の方は「ボランティアの人が来て、話を聞いてくれるだけで心の復興に繋がる」と言っていた。次に漁業をしている方は「ボランティアに来てくれるのは嬉しいが、気持ちとしてはボランティアに頼らないようにしたい」と言っていた。私のボランティアに対するイメージは、前者の方の意見だった。しかし、4年がたった今は、後者の方の意見が被災した方が思う本当の

意見だろう。その方は「ボランティアは来てほしい時期に来てくれるわけではないから、ボランティアに頼ってばかりでは自分たちが自立できなくなってしまう」と言っていた。これを聞いてボランティアを受け入れる立場でもボランティアとの付き合い方を考えていることに驚いた。しかし、何よりも大切なボランティア活動は東日本大震災を忘れずに、後生に語り継ぐことであろう。

三つ目にこのフィールドスタディは私に将来について考える「キッカケ」を与えてくれた。私はまちづくりに興味があり、将来は公務員として地方行政を担いたいと考えている。東京で就職したいと思っていたが、このフィールドスタディに行って被災地で就職するという道も考えようと思った。その理由は、被災した人々に行政の不満をたくさん聞き、自分が被災地の行政に入ることで復興の手助けをしたいという思いを抱いたからだ。私が被災した語り部の方が話した内容の中で一番胸に刺さったのが「東京オリンピック」の話である。語り部の方は、まだ全然復興していないのになぜ今オリンピックを行うのかわからないと言っていた。私はそれを聞いてハッとした。自分はニュースでオリンピックの開催地が東京に決まった時、ガッツポーズをして喜んだ。フィールドスタディの一日目に石巻市内を回ったが、正直、思ったよりも全然復興していないと感じた。被災地に初めて訪れた私からすると、4年という月日が経ったのだから、道路はきれいに整備され震災の傷跡はあまり感じないかと予想していた。しかし、街のどこを見ても工事中の機械が目に入り、川には未完成の橋が建っていて、まだまだ復興したとは言えない状況であった。東京オリンピックを素直に喜んだ自分を恥ずかしく感じた。また、漁業支援活動で関わった方が「行政は確かに動いてくれているが、住民の声を聞いていない」と言っていた。また復興には、国と地方の二つの行政が関わっているため、その二つの行政が異なる情報を指示するため混乱するそうだ。私はもともと地域住民と近い距離で接することのできる公務員になりたいと思っていた。それは地域住民と一緒に街をつくりたいからだ。しかし、被災地ではそれができていないことを知って、もし自分が被災地で働いたら少しでも住民の声を反映した街づくりに貢献したいと思った。今回このフィールドスタディに行ったことで視野が広がり、将来の幅が広がった。

このフィールドスタディに参加して三つの多くのキッカケを掴んだことは、これから私が東日本大震災と関わる上での「スタート」であると私は考える。今回フィールドスタディでは被災した方、NPO や NGO の立場から復興支援する人の方の話を聞くことができた。もし私が次に訪れるなら、その両者に加え「行政」の立場の人から話を聞きたい。

#### 【参考文献】

中原健一郎 (2012) 『復興支援ボランティアもう終わりですか?』 社会批評社。